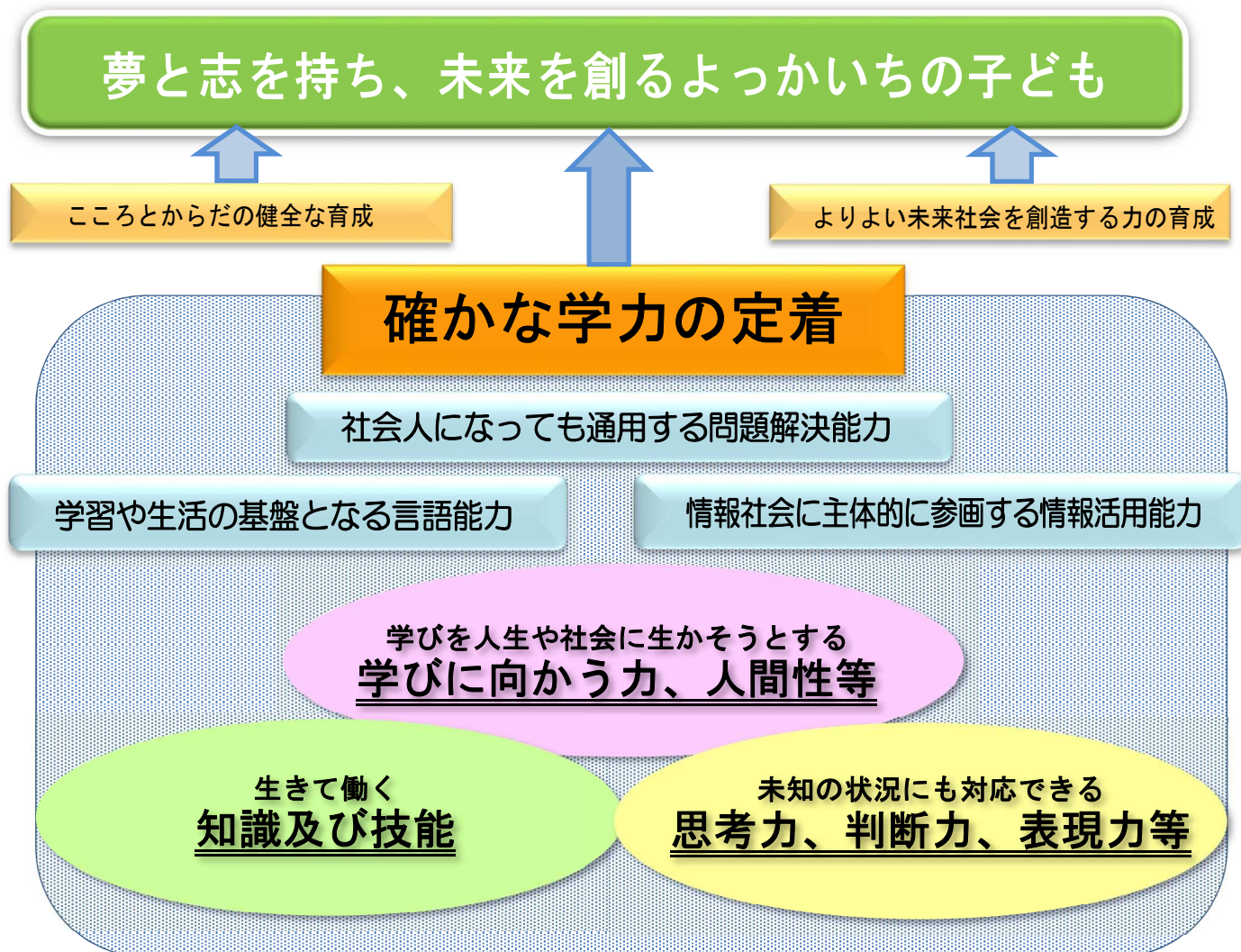


確かな学力の定着

これからの教育は、変化が激しく予測困難な時代の中でも通用する「確かな学力」を、子どもたちに確実に身に付けさせることが求められています。

そのために、生涯にわたって学習する基盤が培われるよう、基礎的な「知識及び技能」を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な「思考力、判断力、表現力等」を育み、「学びに向かう力、人間性等」を養います。

さらに、問題解決能力、言語能力、情報活用能力といった教科等横断的に育む力について、全教育活動を通じて育成することで、本市の目指す「夢と志を持ち、未来を創るよっかいちの子ども」を育てます。



1 「主体的・対話的で深い学び」の実現

子どもたちが、学習内容を人生や社会のあり方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために、適切に教育課程を編成し、各教科等の学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の質的向上を図る「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進する。

(1) 問題解決的な授業づくり

① 各教科等における資質・能力の育成

- 子どもに「何ができるようになるか」という新しい時代に必要となる資質・能力を育成するために、「何を学ぶか」という学習内容と「どのように学ぶか」（主体的・対話的で深い学び）という学びの過程を組み立てる。各教科等で以下の資質・能力の3つの柱について、相互に関連させながら育成する。

学びに向かう力、人間性等

自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度、自分の思考や行動を客観的に把握し認識する「メタ認知」に関わる力など、子どもたちがよりよい社会や幸福な人生を切り拓いていくために必要な力や、リーダーシップ、チームワーク、感性、優しさや思いやりなどの人間性等に関するものも幅広く涵養を図る。

知識及び技能

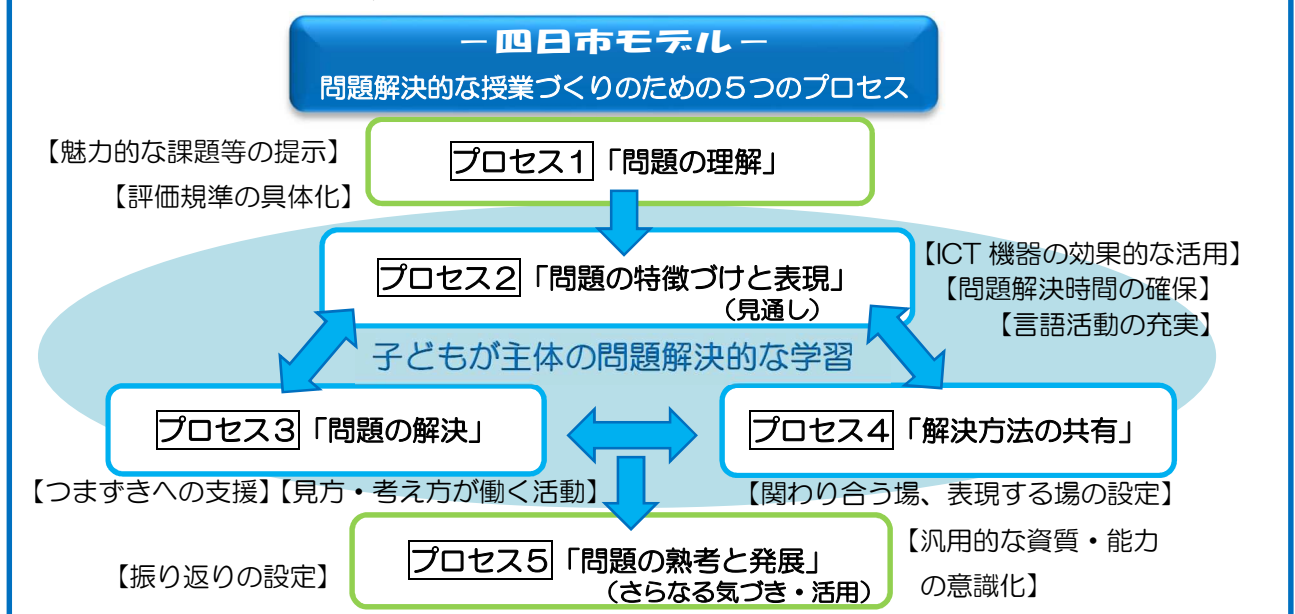
「知識」は、生きて働く概念として習得されることや、新たな学習過程を経験することを通して更新されていくことが大切である。「技能」についても、既得の技能等と関連付け、他の学習や生活場面でも活用できるように習得させる。

思考力、判断力、表現力等

「知識及び技能」を活用して課題を解決するために必要な力である。「問題発見・解決につなげていく過程」、「多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程」、「意味や価値を創造していく過程」といった3つの過程を大切にしてい、各教科等の内容に合わせて育成していく。

- 教科等において育成する資質・能力、全国学力・学習状況調査の分析等を基にした子どもの実態、単元のねらいや教材の特性などを踏まえ、子どもの具体的な学びの姿を考えながら「主体的・対話的で深い学び」となるよう適切な指導計画を構築する。

本市では、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、以下の通り「問題解決的な授業づくりのための5つのプロセスに基づいた学習」（四日市モデル）により、個性を生かし多様な人々と協働して問題を解決していく授業を推進する。



- ・ 1回の授業で全ての学びを実現させるのではなく、単元や題材など 内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこにするか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、子どもが考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるかを考えて、指導計画を立案する。
- ・ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、子どもたちが各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて、資質・能力を確実に身に付けていけるようにする。
- ・ 単元や題材などを見通した学習を行うに当たり、基礎となるような「知識及び技能」の習得に課題がある場合は、その「知識及び技能」について確実な習得を図る。
- ・ 授業と家庭の連携を図り、宿題や予習・復習などの学習課題を適切に課したり、発達の段階に応じた学習計画の立て方や学び方を促したりすることで、確かな学力の定着につなげる。

② 学習の基盤となる資質・能力等の育成

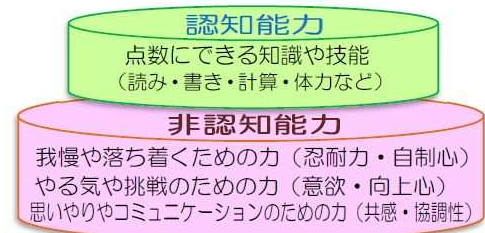
- ・ 各学校においては、教科等の目標や内容を見通し、学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力について、教科等横断的な学習を充実させることで、その資質・能力の涵養を図る。
※現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力はⅢ章5項で記述する。

言語能力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 言葉の働きや役割に関する理解、言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け、言葉の使い方に関する理解と使い分け、言語文化に関する理解等 ・ 情報を理解したり、文章や発話により表現したりするための力 ・ 言葉を通じて、社会や文化を創造しようとする態度、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度、集団としての考えを発展・深化させようとする態度、心を豊かにしようとする態度等
情報活用能力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習活動において必要に応じて情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を分かりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりすることができる力 ・ 情報手段の基本的な操作の習得や、プログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計等に関する資質・能力等
問題発見・解決能力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各教科等における問題の発見・解決に必要な力、各教科等で身に付けた力を統合的に活用する力等

- ・ 中学校3年生にリテラス論理言語力検定を位置付け、検定に向けた計画的な取組を行う。

③ 非認知能力（社会情動的スキル）の育成

- ・ 認知能力（点数化することができる力）の土台となる「非認知能力」（点数化が難しい力）について、全ての教育活動を通じて涵養を図る。
- ・ 非認知能力は、学びに向かう力、人間性等の育成に欠かせない力であり、キャリア教育とも関連させて、自分が意識して伸ばす能力を見つけさせ、意図的・計画的・系統的に育成していく。



(キャリア教育 P34・35・36 参照)

(2) 指導方法・指導体制の工夫

子どもの習熟の程度や興味・関心に応じた指導を通して、基礎・基本の定着を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」を充実させ、一人一人の個性や能力に応じたきめ細かな教育を目指す。

① 効果的な少人数指導の進め方

- ・ 教育課程等を工夫し、学校全体で組織的に取り組むことのできる体制を整備する。
- ・ 育成する資質・能力や子どもの実態等に合わせ、学級全体での指導と少人数指導（習熟度別、ティーム・ティーチング等）を単元計画に効果的に位置付ける。

I 確かな学力の定着

〈四日市市学校教育ビジョン 基本目標 1-①〉

- ・ 指導に関わる全ての教員で単元や授業のねらいを確認するとともに、課題、発問、板書、教材、役割分担などについて共通理解をして単元を進める。
- ・ 一人一人の学習の状況を把握し、指導に関わる全ての教員で共通理解や指導改善を図りながら単元を進める。
- ・ ねらいや学習内容等を考慮し、以下のように学習形態を工夫する。

《少人数指導の留意点等》

<p style="text-align: center;">【習熟度別】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 優越感や劣等感を生じさせないこと、同じ集団でも一人一人のつまづきが違うことなどを理解し、個に応じた指導を行う。 ・ 子どもや保護者にコースガイダンスを十分行い、そのねらいについて理解を求め、適切な集団を選択させる。 	<p style="text-align: center;">【テーマ別】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習意欲を高めるため、子どもの興味・関心に合わせたテーマを選択させる。 ・ 自分なりに調べたり、まとめたりするなど、個に応じた学習を展開できるようにする。 ・ テーマ別に学んでいることを生かし、必然性のある聞き合いを設定する。
<p style="text-align: center;">【チーム・ティーチング】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 習熟に差が生じていない場面、単元・授業の導入場面、基本的な内容を学習する場面、作業的な学習活動を行う場面等で効果的である。 ・ グループに分かれて課題解決に取り組みせることで、話し合いにより、多様な考えに触れ、自分の考えを深めることができるようにする。 	<p style="text-align: center;">【同質集団】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学級を機械的に分けることになるため、学級全体での指導やチーム・ティーチングと同様に、個人差が生じることが多いが、その「個人差」を生かして学び合わせる。

② 小学校高学年における一部教科担任制の推進

- ・ 各教科等の学習が高度化する小学校高学年において、外国語、理科、算数及び体育などを中心に、一部教科担任制を取り入れる。
- ・ 従前の少人数指導や担任等の交換授業等とも関連させて授業の質の向上を図り、子ども一人一人の学習内容の理解度・定着度の向上や充実した学びにつなげる。
- ・ 複数教員による多面的な児童理解を通して、子どもの不安感への気づきや様々な角度からのアプローチ（指導）によって子どもの心の安定を図り、学習意欲の向上につなげる。
- ・ 複数の教員が関わることで、子どもに様々な価値観に触れさせる。
- ・ 小中学校間の連携による小学校から中学校への円滑な接続を図る。

③ 個に応じた指導の充実（「個別最適な学び」）

- ・ 子どもが自己調整をしながら学習を進め、各教科等における資質・能力を確実に身に付けることができるように、「指導の個別化」と「学習の個性化」を進める。

<p style="text-align: center;">指導の個別化</p>	<p>支援の必要な子どもに重点的な指導を行うなど、効果的な指導の実現や、一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行う。</p>
<p style="text-align: center;">学習の個性化</p>	<p>様々な体験活動から得た子どもの興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、子ども一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供する。</p>

- ・ 「個別最適な学び」が孤立した学びにならないよう、協働的な学びと一体的に充実させ、授業改善につなげる。

- 子どもや学校の実態に応じて、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れることなどにより、個に応じた指導の充実を図る。また、その際にはICT機器を活用した学習等を効果的に組み合わせて指導する。

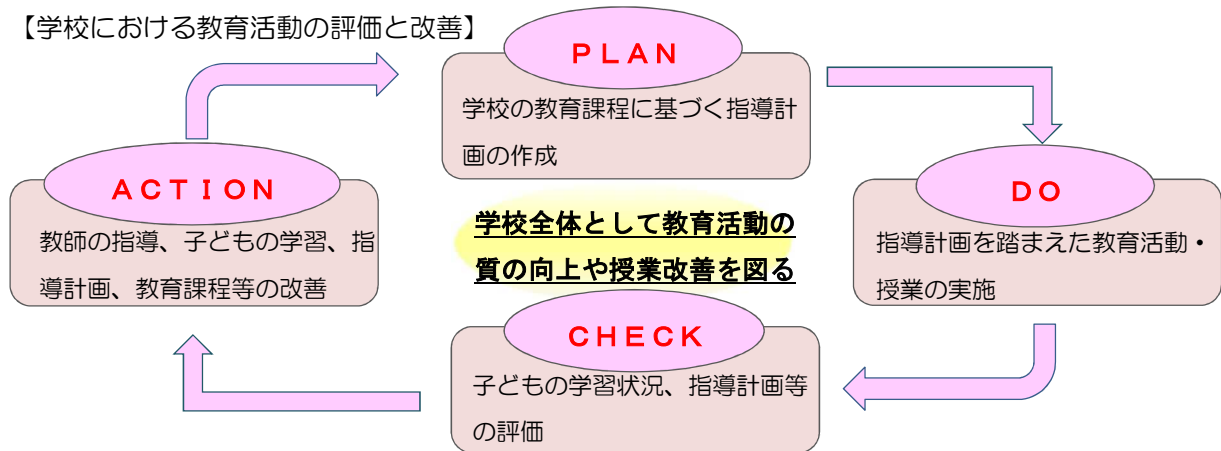
(3) 指導と評価の一体化

① 学習評価の意義等

学習評価は、学校の教育活動に関し、子どもの学習状況を評価するものである。「子どもにどのような力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、子どもが自らの学習を振り返って次の学習に向かえるようにすることが大切である。

そのため、各学校は日々の授業の下で子どもの学習状況を評価し、その結果を子どもの学習の改善や教員の指導の改善、学校全体としての教育課程の改善、校務分掌を含めた組織運営等の改善に生かす中で、学校全体として組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っていく。

【学校における教育活動の評価と改善】

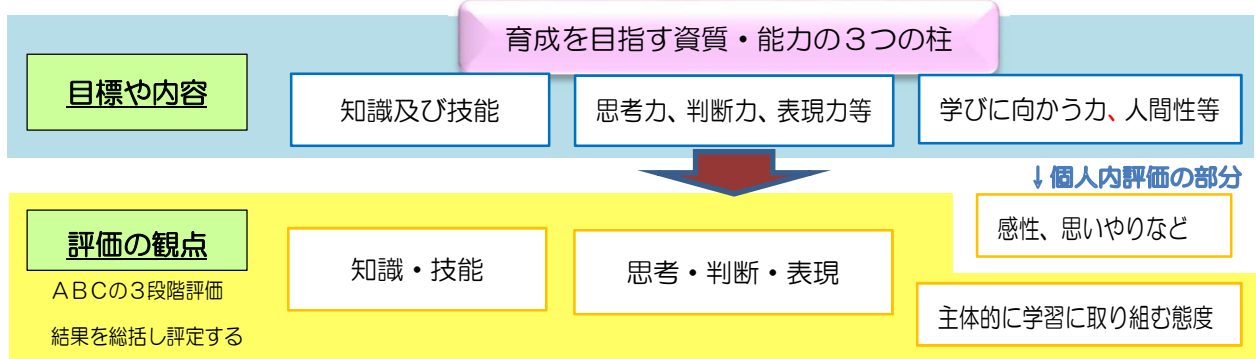


日々の授業において、教員は「目標とする資質・能力が身に付いているか」（目標に準拠した評価）を見取る。そのため、「主体的・対話的で深い学び」の実現により、子どもの学習状況等を適切に捉え、次の2つの改善に生かすことが求められる。

- ◆ 期待する子どもの姿が見られなかった場合は、教員はその要因を整理し、目標の実現やつまずきの解消に向けて次の指導に生かすこと。（授業改善）
- ◆ 子どもが自らの学習を振り返り、学んだことや課題等を整理し次の学習へ生かすこと。（学習改善）

② 学習評価の基本構造

学校は、学習指導要領に示されている各教科等の目標や内容に照らして、学習の状況进行评估する「目標に準拠した評価」を行う。



③ 内容のまとめりごとの学習評価の進め方

単元や題材における観点別学習状況の評価を進めるためには、年間の指導と評価の計画を確認し、学習指導要領の目標や内容、「内容のまとめりごとの評価規準」の考え方等を踏まえ、以下のように進めていく。

①

単元や題材の目標や評価規準を設定する

- ・ 学習指導要領の目標や内容、学習指導要領解説等を踏まえて、単元や題材の目標を作成する。
- ・ 子どもの実態、前単元までの学習状況等を確認する。

②

「指導と評価の計画」を作成する

- ・ 単元や題材の目標を踏まえ、指導時数や単元の進め方を決定する。
- ・ 単元や題材の目標、評価規準を踏まえ、評価する場面や評価方法を計画する。
⇒ どのような評価資料（行動観察、ノートやワークシートの記述内容、作品等）を基に、「おおむね満足できる」状況（B）と評価するかを考えたり、「努力を要する状況」（C）への手立て等を考えたりする。

記録に残す評価

内容のまとめりの中で、指導したことの達成状況が適切に見取れる段階で実施する評価

指導に生かす評価

目標の実現のために、子どもの学習状況を適切に見取って、つまずきの解消を図るために毎時間実施する評価

- ・ 3つの資質・能力（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）をバランスよく指導し評価する。

③

授業を行う

- ・ 「指導と評価の計画」に沿って、指導や評価を行い、子どもの学習改善や指導者の指導改善につなげる。
- ・ 実際の授業において、適切に子どもの姿の見取りを行い、評価するためには、より具体的な評価規準として、発言や記述の内容レベルで子どもの姿を具体化しておく。

④

観点ごとに総括する

- ・ 記録した評価資料やそれに基づく評価結果などから、観点ごとの総括的評価を行う。
- ・ 評価結果から、次への指導の見通しを持つ。

■「主体的に学習に取り組む態度」の評価のポイント

「知識及び技能」を獲得したり、「思考力、判断力、表現力等」を身に付けたりすることに向けた①粘り強い取り組みを行おうとしている側面、また粘り強い取り組みを行う中で、②自己調整しようとする側面をノートやレポート等の記述、行動観察などから評価する。

※ 教員は、課題（めあて）に合わせた学習の進め方や工夫など、自己調整している意思的な側面が表れるように発問することで、評価規準に照らした姿を見取る。

(4) 家庭学習と授業の連携

① 学びに向かう力を育む家庭学習

学校で学習したことを家庭で復習することで習熟・定着させ、毎日学習を続けることにより、自ら進んで学ぶ習慣を身に付けることができる。目的意識をもって家庭学習を続けることが、次の学習への意欲を高め、自分で学習時間をつくり出そうとす気持ちを育てていくことができる。

- ・ 課題を出す際に、小学校においては、学校・学年内で組織的計画的に提示する。中学校においては、学年内で教科間の量や質を考慮して共通理解のもと提示する。
- ・ 教員は、その意義や意図・ねらい、評価規準や方法などを子どもへ示すことで、子どもの学習意欲や根気、課題発見力・課題解決力等、資質・能力を総合的に養う。
- ・ 課題や量を自分で考えて取り組む「自主学習」を励行させることで、学習に対する主体性を育てる。
- ・ 提出された課題については丁寧に評価し、把握した一人一人の強みや弱みを授業づくりに生かすとともに、評価後、校内学習環境整備として効果的に掲示したり、紹介したりする場面を設定する。
- ・ 「家庭学習の手引き」等を活用して保護者に家庭学習の目的や内容を伝えることで、取組の充実を図る。

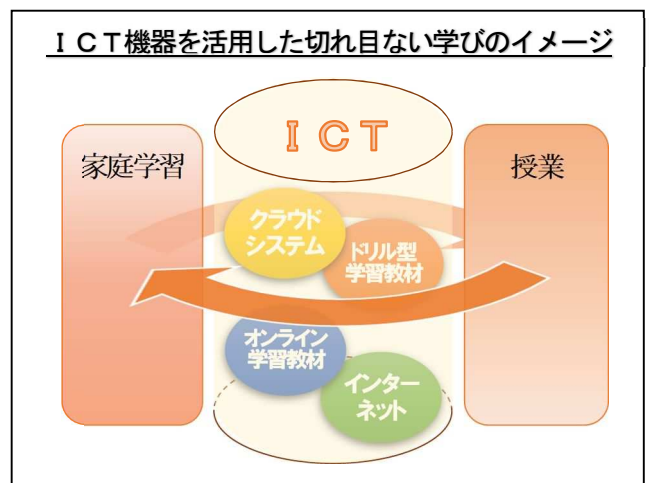
② ICT機器を活用した家庭学習

ICT機器を活用することにより、学びたいときに学ぶことができる切れ目のない学びへとつなげる。その際、家庭学習を視野にいれた、授業の展開を考え、子どもの学びを深めるようにする。家庭学習と授業を連携させ、子ども一人一人の知識及び技能等に関する学習計画、学習履歴（スタディ・ログ）やCBTシステム等を活用することで個別最適な学びの充実を図る。

- ・ オンライン学習教材やドリル学習型教材、クラウドシステム等を活用し、興味や関心に応じた多様な学習機会を確保することで、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組ませる。
- ・ わからないときに本をみて調べさせたり、インターネットで検索させたりすることで、情報を主体的に収集・判断する力を身に付けさせる。
- ・ 学習動画やデジタル教材などを用いて授業の予習・復習を行うことにより、各自のペースで継続的に学習に取り組ませる。

【課題例】

- * その日の授業内容をオンライン学習教材で繰り返し学習し、定着を図る復習課題
- * 動画教材などを活用して事前学習し、授業で意見交流し合う課題
- * 音読やスピーチ等の様子を録画し、観点に沿って自分自身で振り返る課題
- * 主体的に自分で調べたり考えたりした情報を、思考ツールで整理したりまとめたりする課題
- * クラウドシステムを通して意見を交流し、協働的に学習する課題



2 ICT活用による情報活用能力の育成

四日市市GIGAスクール構想※をもとに、「情報活用能力」を基盤とした、生涯にわたって自ら学び続け、他者と協働して未知の課題を解決できる基本的な資質・能力を育成します。

(1) 情報活用能力を育成するICTを活用した教育活動の充実

① 情報活用能力の育成に向けた推進体制の整備

- ICTコーディネーターを中心として、学校全体のICTの活用を推進する。
- 今後のICTコーディネーターを担う人材を育成するための情報化推進リーダー養成講座、ICT活用実践推進校の公開授業研究会、ICTにおける著名な講師を招聘した研修会等へ参加したり、情報活用能力育成についての校内研修会を実施したりすることで、教員の指導力向上を図る。

② 発達段階に応じた情報活用能力の観点別到達目標

- 情報活用能力を「情報活用の実践」「情報社会に参画する態度」「情報の科学的な理解・思考力・判断力・表現力」の3観点に分け、観点ごとに発達段階に応じた到達目標を定め、子どもたちの情報活用能力が積み上がっていくように計画的に取り組む。

③ 教育活動全般におけるICTの活用

- タブレット端末等のICT機器を教科授業だけでなく、学級活動や児童生徒会活動等、教育活動全般で日常的に活用することによって情報活用能力を育む。

④ ICTの新たな可能性を指導に生かす

- これまで活用していた教科書やノート、プリントに加え、デジタル教科書や学習アプリケーションを用い、自主学習や思考ツールを活用した対話的な学習を行うことで、子どもたちの学びを深める。
- タブレット端末を家庭へ持ち帰り、学校で学んだことを家庭で確認するなど、学校と家庭における連続的（シームレス）な学びを実現する。
- ICTを活用することで、他者の考え方や自分自身の学習履歴の可視化を図り、自己評価や他者評価を通して問題解決能力を育む。

(2) 情報モラル教育の充実

① 情報社会に参画する考え方と態度の育成

- デジタルシティズンシップ（ICTのよき使い手になると同時によき社会の担い手になることを目指す教育）の視点を取り入れた、情報社会に生きるために必要な考え方や態度を育むための情報モラル教育を計画・実施する。
- 保護者向け配付資料「タブレット学習をはじめる前に」等をもとに、家庭でのICT活用に関するルールづくり等について家庭と連携する。

具体的な取組

”すぐにでも”どの教科でも”文房具のように使えることを実感する

- ①インターネットを活用した調べ学習
- ②文章、プレゼンテーション資料の作成
- ③AIドリルなどを活用した個別学習
- ④毎朝の健康チェック
- ⑤録画機能を活用した自主学習

タブレットやICT機器を用途に応じて適切に使うための能力を身に付ける段階

学びを深める授業をととして、資質・能力を確実にする

- ①一斉学習
 - ・ 教員による教材の提示
 - ・ 児童生徒のタブレット画面一斉投映
- ②個別学習
 - ・ 思考ツールによる考えの整理や分析
 - ・ 授業の振り返りや復習問題
- ③協働学習
 - ・ タブレットを活用した意見交流・発表
 - ・ 他校との遠隔授業による学習

タブレットやICT機器の能力や特徴を生かした授業づくりを通じて、教育・学習効果を高める段階

各教科の学びをつなぎ、一人一人の夢や志の実現に生かす

- ①オンライン社会見学、オンライン職場体験
- ②英語による地球への情報発信
- ③防災アプリを活用した学習
- ④国際交流や他地域との交流



タブレットやICT機器を主体的に活用して、教科の学びを人生の充実やSDGsの視点を活かして社会課題の解決に応用できる段階

※GIGAスクール構想とは…「Global and Innovation Gateway for All」の略でSociety5.0時代に生きる子どもたちの未来を見据え、義務教育課程1人1台分の端末及び市立学校の高速度大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、誰一人取り残すことのない、個別最適な学びを全国の学校現場で持続的に実現していこうとする取組（令和元年12月文部科学省より）

(3) プログラミング教育の充実

① プログラミング教育のねらい

- ・ 論理的思考力を育むとともに、プログラムの働きやよさ、情報社会がコンピュータをはじめとする情報技術によって支えられていることなどに気づき、身近な問題の解決に主体的に取り組む態度やコンピュータ等を上手に活用してより良い社会を築いていこうとする態度などを育む。

② プログラミング的思考を高めるための授業づくりの推進

- ・ 「小中学校におけるプログラミング教育～四日市版カリキュラム～(改訂版)」に沿って、低学年・中学年・高学年、中学校において、子どもの発達段階に応じた系統的な指導計画を位置づける。

◇ 小学校 ◇

総合的な学習の時間、算数科、理科等を中心に各教科・領域等横断的に学校教育活動全体で取り組む。

1・2年生：キーボードやマウスの操作に慣れる。(各教科等)



3年生：プログラミングソフト(「スクラッチ※1」等)を用いて命令ブロックを配置し、命令通りにキャラクターが動くことを学ぶ。
(総合的な学習の時間)

4年生：プログラミングソフト(「スクラッチ」等)を用いて自分が意図した動きをさせるために必要な手順があることや、身近な生活でコンピュータが活用されていることを学ぶ。
(総合的な学習の時間)



5年生：正多角形の作図をするプログラムを作成し、繰り返し作業が必要なことや手順の一部を変えることでいろいろな多角形に応用できることを学ぶ。
(算数科)

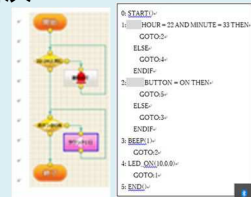
6年生：ソフトウェア上で目的に合わせて機器を制御するプログラムを作成することを通して、その仕組みを学ぶ。
(理科)



◇ 中学校 ◇

技術・家庭科(技術分野)において、小学校において育成された資質・能力を土台に、より高度な学習内容に取り組む。

- ・ ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミングによる問題解決
例) 安心して互いにコメントなどを送受信できる簡易なチャットのプログラムを制作する。
- ・ 計測・制御のプログラミングによる問題解決
例) センサーを用いて振動を感知して、音や光で通知するプログラムを制作する。(地震通報システムのシミュレート)



※1 スクラッチ(Scratch)はMITメディア・ラボのライフロン・キンダー・ガーデン・グループによって開発されたもの。詳しくは<http://scratch.mit.edu>参照。

3 言語活動の充実による読解力・表現力の育成

言語能力（読解力・表現力等）は、子どもの学習活動を支える重要な役割を果たすものであり、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となるものである。そのため、言語能力の向上は、子どもの学びの質の向上や資質・能力のあり方に関わる重要な課題として受け止め、重視していくことが大切である。

国語科を要しつつ教育課程全体を見通した組織的・計画的な取組を設定し、全ての教科等の特質に応じた言語活動の充実を図ることで、言語能力の育成を目指す。

（1）育成を目指す言語能力について

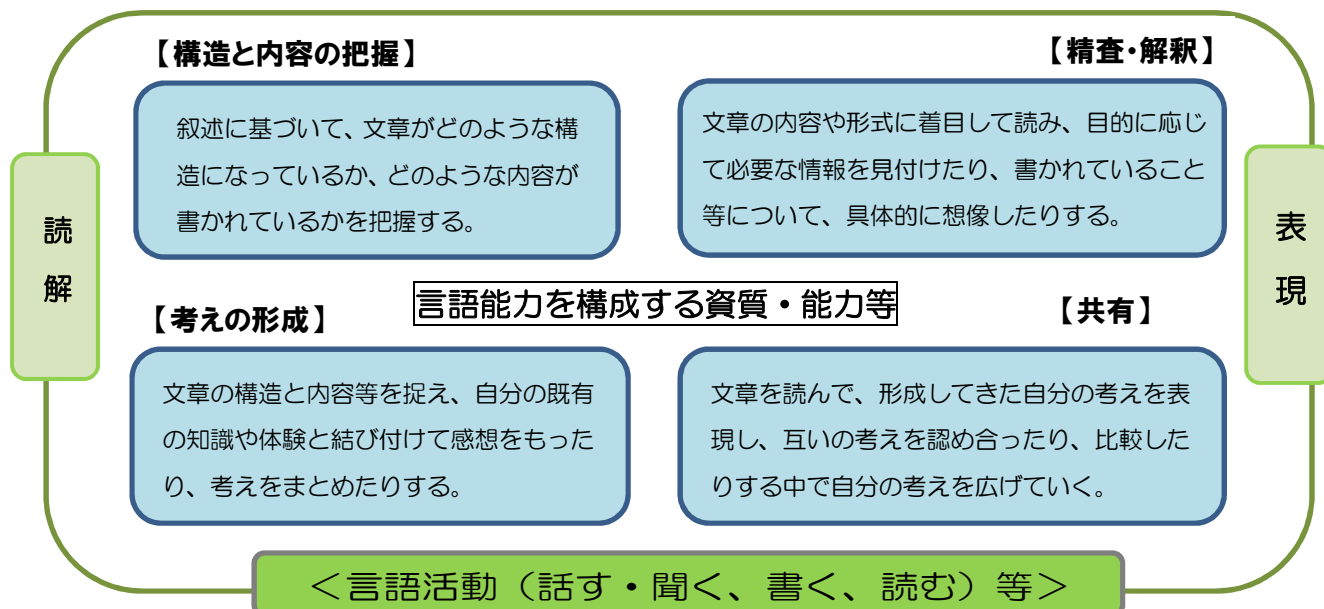
- ・ 言語能力を構成する資質・能力について、以下のとおり整理する。

言語能力を構成する資質・能力		
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
<ul style="list-style-type: none"> ○ 言葉の働きや役割に関する理解 ○ 言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け ○ 言葉の使い方に関する理解と使い分け ○ 言語文化に関する理解 ○ 既知知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解 	<ul style="list-style-type: none"> ○ テキスト（情報）を理解したり文章や発話により表現したりするための力 【創造的・論理的思考の側面】 ・ 情報を多面的・多角的に精査し、構造化する力 など 【感性・情緒の側面】 ・ 言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力 など 【他者とのコミュニケーションの側面】 ・ 言葉を通じて伝え合う力 ○ 考えを形成し深める力 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 言葉を通じて、社会や文化を創造しようとする態度 ○ 自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度 ○ 集団としての考えを発展・深化させようとする態度 ○ 心を豊かにしようとする態度 ○ 自己や他者を尊重しようとする態度 ○ 自分の感情をコントロールして学びに向かう態度 ○ 言語文化の担い手としての自覚

（2）読解力・表現力を高める授業づくり

① 国語科における読解・表現等の関連

- ・ 国語科の授業では、「話す・聞く、書く、読む」といった言語活動を通じて、文章などの情報を読解し表現につなげること、表現したことから理解し直すことなど、理解（読解）と表現等を相互に関連させながら資質・能力を育成していく。



- 本市では、前掲の言語能力の中でも「言葉の働きや役割に関する理解」、「言葉の特徴やきまり、使い方に関する理解と使い分け」、「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」に力点をおいている。
- このことを踏まえ、各学校においては、説明的な文章に関わる教材を中心に「読解力を育む『20の観点』」等を活用し、子どもの読解力・表現力の素地を育む。

読解力を育む「20の観点」(小学校)		
低学年	中学年	高学年
①主語と述語 ②共通・相違 ③題名・見出し ④文章と資料 ⑤問いと答え ⑥順序(時間、事柄)	⑦修飾と被修飾 ⑧指示語と接続語 ⑨形式段落と意味段落 ⑩文章構成 ⑪要点(抽象と具体) ⑫考えと理由(因果関係) ⑬比較や分類 ⑭要約(抽象と具体)	⑮表現の技法 ⑯思考に関わる語句 ⑰要旨(主張) ⑱資料等の効果 ⑲筆者の意図 ⑳文章の特徴(提案、案内等)

② 各教科等における表現活動の日常化

言葉を直接の学習対象とする国語科では、「言語能力を構成する資質・能力」を育成するため、日常生活に必要とされる記録、説明、報告、紹介、感想、討論などの言語活動の充実を図る。また、その他の教科等においては、教科等の特質に応じた表現活動を日常的に設定する。

〈活動例〉

話す・聞く活動

- 説明や報告など調べたことを話したり、それらを聞いたりする活動。
- 図表やグラフなど、様々な資料を読み取り、根拠や理由を説明する活動。
- インタビューなどをして必要な情報を集めたり、それらを発表したりする活動。
- 提案や主張など自分の考えを話したり、それらを聞いて質問したり評価などを述べたりする活動。

書く活動

- 日記や手紙を書くなど、思ったことや伝えたいことを書く活動。
- 調べたことをまとめて報告するなど、事実やそれを基に考えたことを書く活動。
- 事実や経験を基に、感じたり考えたりしたことについて文章に書く活動。
- 作品等を比較して特徴を文章化する活動。
- 多様な考えができる意見を述べるなど、自分の考えを書く活動。

(3) 校内の言語環境の整備

子どもたちの言語能力の育成を支える言語環境を学校全体で整える。

音声言語の環境

- 教員が丁寧な言葉遣い、明瞭な発音、正しい文章で話す。
- 相手に応じた話し方(敬語など)の使い分けを意識させる。
- 校内放送では、適切な言葉を使って簡潔に分かりやすく話すようにする。
- 集会では、朗読や群読の発表、パネルディスカッション、スピーチなど発表の場をつくる。

文字言語の環境

- 正確で丁寧な文字で板書をする。
- 教室内外に、子どもの作品、教科等に関連する資料を掲示したり、新聞や意見箱など子どもが発信できる場を設定したりする。
- 校舎内には、季節や学年に応じた作品や資料を掲示する。
- 読書を通しての感想交流、1分間コメントなど言語活動の機会を設定する。

I 確かな学力の定着

〈四日市市学校教育ビジョン 基本目標1-③〉

【各教科等における言語活動の充実（例）】 ※学習指導要領解説 総則編より

各教科等においては、国語科で培った能力を基本に、それぞれの教科等の目標を実現する手立てとして、以下のような言語活動を行う。

教科	小学校	中学校
社会科	社会的事象の特色や意味、社会に見られる課題などについて、多角的に考えたことや選択・判断したことを論理的に説明したり、立場や根拠を明確にして議論したりするなどの活動	社会的事象の意味や意義、事象の特色や事象間の関連、社会に見られる課題などについて、考察したことや選択・判断したことを論理的に説明したり、立場や根拠を明確にして議論したりするなどの活動
算数・数学科	具体物、図、言葉、数、式、表、グラフなどを用いて考えたり、説明したり、互いに自分の考えを表現し伝え合ったり、学び合ったり、高め合ったりするなどの活動	数学的な表現を用いて簡潔・明瞭・的確に表現したり、互いに自分の考えを表現し伝え合ったりするなどの活動
理科	問題を見だし、予想や仮説、観察、実験などの方法について考えたり説明したり、観察、実験の結果を整理し考察したり、科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりするなどの活動	問題を見だし観察、実験を計画したり、学習活動、観察、実験の結果を分析し解釈したり、科学的な概念を使用して、考えたり説明したりするなどの活動
音楽科	音楽によって喚起されたイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図、音楽を聴いて感じ取ったことや想像したことなどを伝え合い共感するなどの活動	音楽によって喚起された自己のイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図、音楽に対する評価などを伝え合い共感するなどの活動
図工・美術科	感じたことや思ったこと、考えたことなどを、話したり聞いたり話し合ったりする等、言葉で整理するなどの活動	アイデアスケッチで構想を練ったり、言葉で考えを整理したりすることや、作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどの活動
技術・家庭科	衣食住など、生活の中の様々な言葉を実感を伴って理解する活動や、自分の生活における課題を解決するために言葉や図表などを用いて生活をよりよくする方法を考えたり、説明したりするなどの活動	衣食住やものづくりなどに関する実習等の結果を整理し考察する活動や、生活や社会における課題を解決するために言葉や図表、概念などを用いて考えたり、説明したりするなどの活動
保健体育・体育科	筋道を立てて練習や作戦について話し合ったり、身近な健康の保持増進について話し合ったりするなどの活動	筋道を立てて練習や作戦について話し合ったり、個人生活における健康の保持増進や回復について話し合ったりするなどの活動
生活科	身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それらを通して気付いたことや楽しかったことについて、言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法により表現するなどの活動	

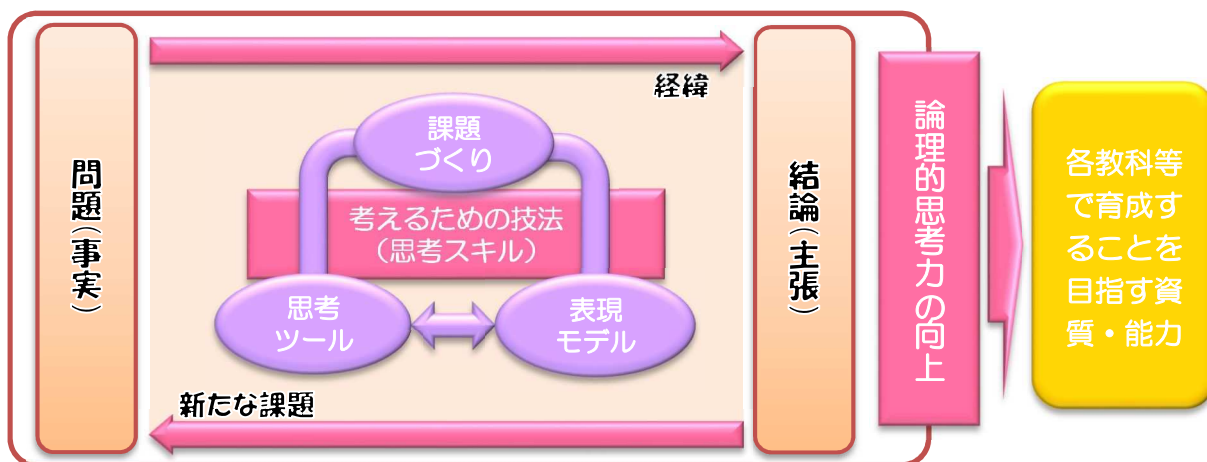
外国語科及び外国語活動は、国語科と共通する指導内容や方法について連携させることで、言語能力の育成につなげる。

4 筋道立てて説明できる論理的思考力の育成

「論理的思考力」を「道理や道筋に則って思考を巡らせて結論を導いたり、複雑な事柄を分かりやすく説明したりできる力」としている。教育活動全体を通じて、他者と協働して問題を解決しようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動を行う中で、筋道を立てて考え、問題を解決したり、自分の考えを根拠立てて整理し、相手に対して分かりやすく伝えたりできる力を育成する。

ち、互いの意見を交流させ、自分の知識や経験と結び付けて解釈することによって自分の考えを持たせるようにする。

- ・ 考えるための技法（思考スキル）を意識しながら、自分の考えの根拠や理由、立場を明確にして説明し、自分の考えを深めていく学習過程を通じて、論理的思考力の向上を図る。



問題解決的な学習の中で、『考えるための技法（思考スキル）』を意識し、「①課題づくり」「②思考ツール」「③表現モデル」を活用した授業を通して、問題（事実）から結論（主張）に至った経緯を説明する場面の設定をする。

① 主体的・探究的に学習をすすめる「課題づくり」

- ・ 子どもの思考を高めるためには、まず自分の考えを持つことが大切である。そのためには、子どもの知的な好奇心が満たされ、探究したくなる課題、自分一人では乗り越えることが難しく、仲間とのつながりを必要とする課題、各教科等の見方・考え方を働かせ、深い学びにつながる課題など、学習内容や子どもの実態に応じた課題を設定する。

② 「思考ツール」で考えや学習の過程を可視化

- ・ 「思考ツール」は、子どもの頭の中で考えていること（思考）を見えるようにすること（可視化）で、考えることの助けとなる。思考を俯瞰して見ることで、他者や自分自身がどう考えているかを把握したり、考えを深めたり、修正したり、創り出したりすることができる。

（例）マトリックス表に整理して、比較して考える。

ベン図に整理して、共通点・相違点を見つける。 など

③ 「表現モデル」が表出される説明場面の設定

- ・ 子どもが「問い」（問題意識）をもち、解決に向かうとき、授業者の働きかけにより、論理的な思考を働かせた学習につなげていくことが大切である。その学習の中で、教員が子どもの言葉に着目し、子どもの「問い」や思考を見取るための1つの指標として「表現モデル」を活用するとともに、授業を構想していく際の参考とする。

【考えるための技法（思考スキル）】

「考えるための技法（思考スキル）」は、考える際に必要になる情報の処理方法を「比較する」、「分類する」、「関連付ける」などのように具体化し、技法として整理したものである。「考えるための技法（思考スキル）」を教科等横断的な学習過程の中で活用し、様々な問題解決の場面において適切かつ効果的に活用できるようにすることで、各教科等で身に付ける資質・能力の育成につなげていく。

順序付ける

- ・ 複数の対象について、ある視点や条件に沿って対象を並び替える。

比較する

- ・ 複数の対象について、ある視点から共通点や相違点を明らかにする。

分類する

- ・ 複数の対象について、ある視点から共通点のあるもの同士をまとめる。

関連付ける

- ・ 複数の対象がどのような関係にあるかを見付ける。
- ・ ある対象に関係するものを見つけて増やしていく。

多面的に見る・多角的に見る

- ・ 対象のもつ複数の性質に着目したり、対象を異なる複数の角度から捉えたりする。

理由付ける（原因や根拠を見付ける）

- ・ 対象の理由や原因、根拠を見付けたり予想したりする。

見通す（結果を予想する）

- ・ 見通しを立てる。物事の結果を予想する。

具体化する（個別化する、分解する）

- ・ 対象に関する上位概念・規則に当てはまる具体例を挙げたり、対象を構成する下位概念や要素に分けたりする。

抽象化する（一般化する、統合する）

- ・ 対象に関する上位概念や法則を挙げたり、複数の対象を一つにまとめたりする。

構造化する

- ・ 考えを構造的（網構造・層構造など）に整理する。

問題解決・探究における情報活用

情報活用能力は、各教科等において、育成した力を活用したり、発揮したりする場面を教科等横断的な視点で意図的に設定するなど、子どもたちが有用性を実感できるようにする。コンピュータを使った内容に限定されるものではなく、各教科等の特質に応じて適切な学習場面で育成することが大切である。

① 情報の収集

新聞や書籍を使った情報収集、調査・実験・観察、インタビュー、アンケート、インターネットでの検索、多様で効果的な情報収集

② 情報の整理・比較

絵・図・表・グラフ・考えるための技法等を用いた整理、目的に応じた情報整理
観点を決めて情報を分類、情報同士の共通点の比較、関係付け

③ 情報の発信・伝達

相手や目的を意識した発表、聞き取りややり取りを含む効果的なプレゼンテーション

④ 統計的な問題解決

統計データの特徴を読み取り、データに基づいた判断や主張を批判的に考察

※ プログラミング、情報モラル・セキュリティについては、P8・9を参照

(2) 総合的な学習の時間の充実

総合的な学習の時間のねらいは、変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することである。

① 総合的な学習の時間で育成をめざす資質・能力

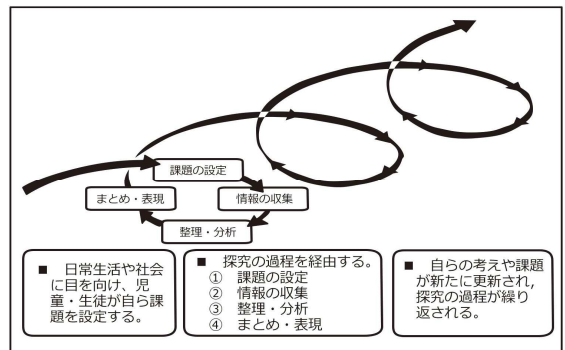
(知識及び技能) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習の良さを理解させる。

(思考力、判断力、表現力等) 実社会や実生活の中から問いを見出し、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現する力を育てる。

(学びに向かう力、人間性等) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いの良さを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を育てる。

② 探究的な学習において大切に学習過程

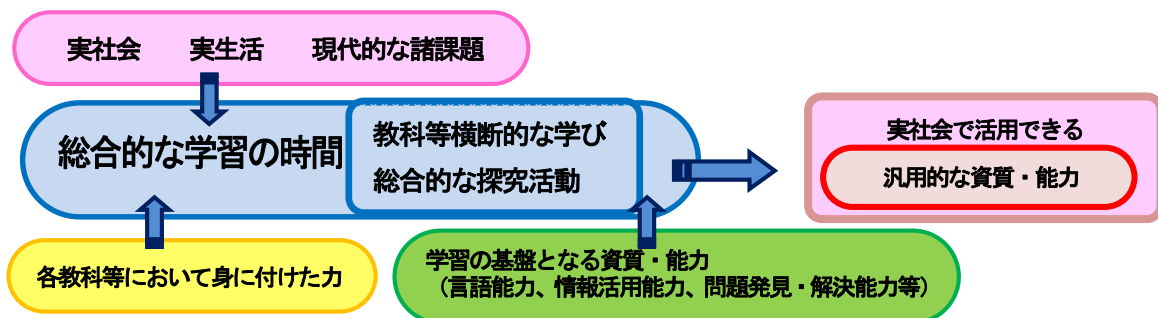
- (1) **課題の設定** 体験活動などを通して、実社会や実生活に向き合う中で、課題を設定し課題意識を持つ。
- (2) **情報の収集** 情報を取り出したり収集したりする。
- (3) **整理・分析** 情報を整理・分析したり、知識や技能に結び付けたりしながら問題解決に取り組む。
- (4) **まとめ・表現** 気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する。



- ・ 異なる多様な他者と協働して問題解決をしたり、相手や目的・場面や状況に応じて適切に表現したり、比較・分類・関連付けなどの**考えるための技法**を活用したりできるようにする。
- ・ 自然体験や職場体験活動、ボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生産活動などの体験活動、観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れる。
- ・ グループ学習や異年齢集団による多様な学習形態、地域の人々や、図書館、博物館等社会教育施設や社会教育関係団体との連携等、地域の教材や学習環境を積極的に活用する。
- ・ コンピュータ等を適切かつ効果的に活用したり、情報手段の基本的な操作を習得したりするなど、情報や情報手段を主体的に選択し活用できるように配慮する。

【総合的な学習の時間に係る資質・能力の関連図】

各学校において定める総合的な学習の時間の目標は、教科等横断的なカリキュラム・マネジメントの軸となるよう、**各学校における教育目標を踏まえて**設定する。探究的な学習において「考えるための技法」を意識的に使えるようにし、各教科等を越えて全ての学習における基盤となる資質・能力を育成していく。さらに、小中学校間において、学びを積み上げていくことができるよう連携を図る。



5 英語コミュニケーション能力の育成

経済、社会、文化等の様々な面でグローバル化が進展し、国際協調の必要性が一層高まる中、これからの社会において、外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えることが予想される。

就学前から英語に出会い、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の言語活動を通して、発達段階に応じた英語コミュニケーション能力の育成を図り、自分の思いや考えを英語で伝えることができる力を育成する。

(1) 就学前からの「学びの連続性」の構築

園・小・中学校の発達段階に応じた学びを意識した系統性を持たせた指導を行う。

【就学前教育～小学校低学年】五感を通じた国際理解教育

- ・ 「四日市市小学校外国語活動カリキュラム」に基づき、担任と派遣英語指導員（HEF）や四日市市英語指導員（YEF）による授業等を実施する。（学期に1回程度）
- ・ 英語の歌を歌ったり、絵本の読み聞かせをしたり、外国の生活や文化を紹介したりして、英語の楽しさを体感させながら、国際理解教育の充実を図る。

【小学校中学年】「聞くこと」「話すこと」を中心としたコミュニケーションの素地となる資質・能力の育成

- ・ HEFと会話することで言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と英語との音声の違い等に気付き、「英語が通じた」という経験を積み重ねながら英語に慣れ親しませ、英語学習への動機づけを行う。
- ・ 身近で簡単な事柄について、英語で自分の考えや気持ちなどを伝え合うなど、子ども同士の関わりを大切にしながら体験的な言語活動を行う。

【小学校高学年】「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」を通して、コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育成

- ・ 教科指導の専門性を持った教員によるきめ細かな指導の充実を図る観点から、英語専科教員を配置し、外国語によるコミュニケーション能力の基礎を培う系統的な指導を行う。
- ・ 「聞くこと」「話すこと」に「読むこと」「書くこと」を加え、児童が「英語を使って何ができるようになるか」という視点から、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせる。

【中学校】「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」を通して、コミュニケーションを図る資質・能力を育成

- ・ 生徒が「英語を使って何ができるようになるか」という視点から、各校で具体的に設定した学習到達目標「CAN-DOリスト」を活用した授業を行うとともに、生徒や保護者等と目標を共有しながら、4技能5領域の総合的な能力の育成を目指す。
- ・ 中学校卒業時に、CEFR A1レベル（英検3級）相当以上を習得できる英語力を目指し、英検I B Aを活用して、生徒の英語学習への動機づけにつなげたり、英語の授業改善を図ったりする。
- ・ 生徒が、授業で学んだ知識・技能を使って、目的・場面・状況に応じて自分の考えや意見等を自由に表現する活動など、YEF等を十分に生かした多様な言語活動を行う。

(2) 大切にしたい5つの視点

① 英語教育における「幼小中連携（情報交換や交流、カリキュラム連携など）」の強化

- ・ 就学前及び小学校低学年において、「四日市市小学校外国語活動カリキュラム」に基づいた英語指導員（YEF・HEF）との授業等を学期に1回程度実施する。
- ・ 「英語を使って何ができるようになるか」という視点で学習到達目標を設定した『CAN-DOリスト』を小中ともに作成し、小中での積極的な活用とその連携を図る。
- ・ 小中の接続の円滑化を目指し、小中間の情報交換や交流、中学校教員による乗り入れ授業を行う。

② 授業内外で英語を使うための環境づくり

- ・ 授業内では、英語指導員（YEF・HEF）との言語活動を通して、子どもの実践的コミュニケーション能力の育成を図る。
- ・ 校内の英語表示や昼の放送、休み時間等でのYEFやHEFとの触れ合い等を利用した、授業外での英語に触れる機会を工夫する。
- ・ 授業そのものをコミュニケーションの場面とするため、中学校の英語科の授業においては基本的に英語で授業を実施する。
- ・ 小学校英語キャンプやYEFによる中学校での特別授業「レッツ・エンジョイ・イングリッシュ」に参加し、多くの英語指導員と触れ合うことで、英語でのコミュニケーション能力の育成を図るとともに、国際的な視野を広げる機会とする。
- ・ 英語担当教員が研修会（YEFによるワークショップ、有識者を招いた講演会等）に参加し、指導力向上を図る。



YEFによる夏季休業中の特別授業

③ 目的・場面・状況に応じた言語活動の充実

Small Talk/ One Minute Talk の活用

既習の文法や言語、収集した情報や体験等を活用し、自分の考えを発信する言語活動を行う。

学校生活・行事等と関連付けた言語活動の実施

学校生活や地域行事、他教科等と関連付けて、互いの考えや気持ちなどを英語で伝え合う対話的な言語活動を実施する。(例) 修学旅行での外国人観光客への英語インタビュー など

市内共通のパフォーマンステストの実施（中）

中学校において、目的や場面、状況に応じて、事実や自分の考え、気持ちなどを整理して話す力を育成するために市内共通のパフォーマンステストを実施する。

④ ICT機器を効果的に活用した言語活動

- ・ デジタル教科書などの教材やタブレット端末等を効果的に活用した言語活動を実施する。

⑤ 「故郷よっかいちプロジェクト」の活用

- ・ 子どもたちが学習した英語を活用し、四日市のことを語れる姿を目指す。

英語で地域発信！学習した英語の活用

〈あすなろう鉄道・三岐鉄道プロジェクト(小)〉

あすなろう鉄道と三岐鉄道の駅構内において、鉄道とその沿線の施設を英語で紹介したアナウンスを放送する。

〈故郷よっかいちプロジェクト(Yokkaichi Project) (中)〉

四日市について紹介した定型文を、授業で定期的に繰り返し練習し、中学校3年間を通して、ふるさと四日市を英語で紹介できるようにする。

- ・ 姉妹都市ロングビーチ市の学校とビデオ交換やオンライン授業等を行い、国際交流を図る。

6 就学前教育の充実

幼児期は、遊びや生活を通して、「生きる力」「共に生きる力」の基礎となる心情・意欲・態度、生活習慣など生涯にわたる人格形成の基礎が培われる重要な時期である。

また、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児自らが周囲の環境と関わり、活動を展開する充実感を十分に味わいながら、発達に必要な体験を重ねていくようにすることが大切である。

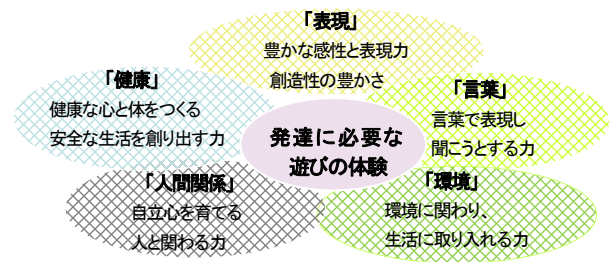
(1) 幼児期にふさわしい生活の展開

- ・ 幼児が周囲の大人から受け止められ、見守られているという安心感が持てるように、しっかりと一人一人の幼児と関わり、信頼関係を築いていくようにする。
- ・ 幼児の興味や関心に基づいた具体的な体験を通して、様々な力を獲得していきけるようにし、活動への意欲が高まるようにする。
- ・ 社会性が著しく発達していく時期であるため、相互に刺激し合い、興味関心を持ちながら、友だちと十分に関わって展開する生活を大切にしていく。

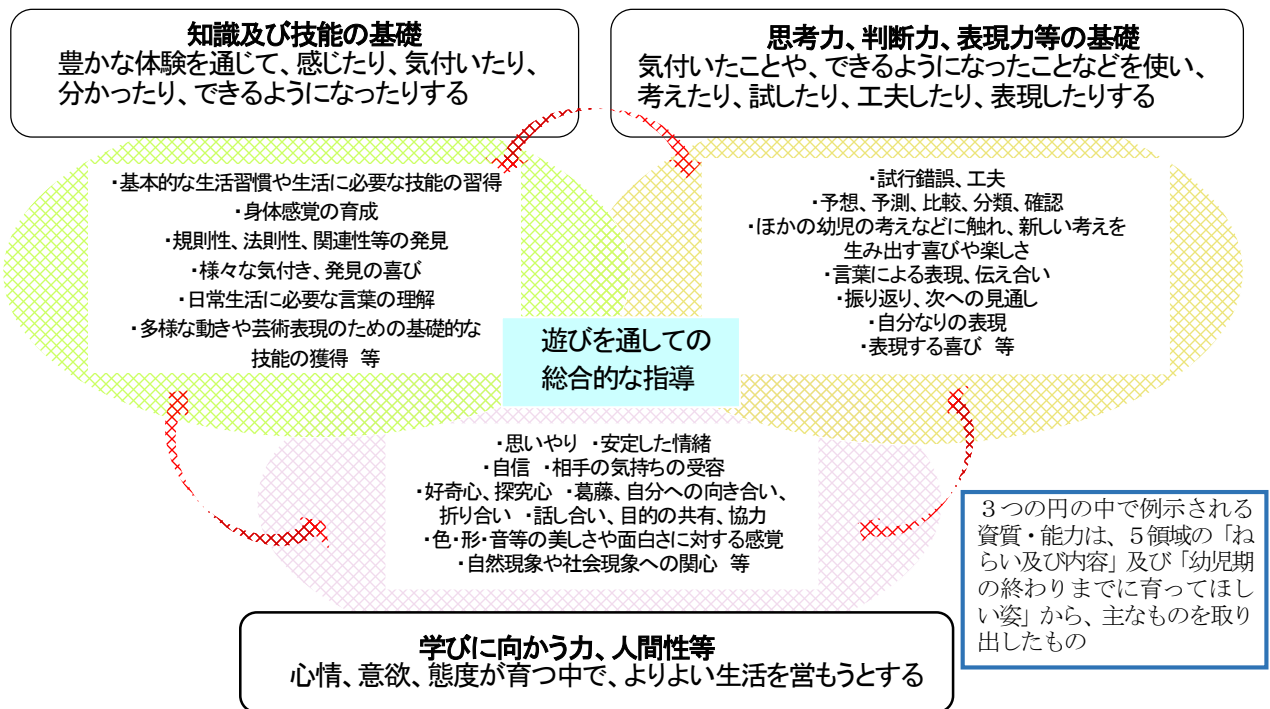
(2) 「遊び」を通しての総合的な指導

- ・ 「遊び」は幼児にとって心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習の場であり、遊びを通して、頭も心も動かして様々な対象と直接関わることを大切にしていく。楽しいことや好きなことに夢中になって取り組み、総合的に学んでいけるようにする。
- ・ 子どもの発達や学びの連続性を踏まえ、探究心や思考力、表現力等に加えて、感情や行動のコントロール、粘り強さ等の非認知能力を育むようにする。
- ・ 幼児の発達の実情や興味・関心等を踏まえながら、5領域に基づいて展開する活動によって、幼児教育において育みたい下図の3つの資質・能力が身に付くように指導していく。

【子どもの育ちと5領域】



【幼児教育において育みたい資質・能力】 ※3つの資質・能力の基礎を一体的に育みます。



3つの円の中で例示される資質・能力は、5領域の「ねらい及び内容」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から、主なものを取り出したもの

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

健康な心と体	自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。	思考力の芽生え	身近な事象から物の性質などを感じ取ったり、予想したりして、多様な関わりを楽しむようになる。
自立心	自分の力でやり遂げる体験などを通じて自信をもって行動するようになる。	自然との関わり・生命尊重	自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。生命の不思議さなどに気づき、動植物を大切にできるようになる。
協同性	友達と一緒に目的の実現に向けて考えたり協力したりするようになる。	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しんだりして、興味や関心、感覚をもつようになる。
道徳性・規範意識の芽生え	よいことや悪いことが分かり、相手の立場に立って行動するようになる。きまりを守ったりするようになる。	言葉による伝え合い	経験したことなどを言葉で伝えたり、話を聞いたりして、伝え合いを楽しむようになる。
社会生活との関わり	家族を大切にしたり、身近な人と触れ合って地域に親しみをもつようになる。遊びや生活に必要な情報を役立てて活動したり、公共施設を利用して、社会とのつながりを意識するようになる。	豊かな感性と表現	心動かす出来事に触れ、感じたことを表現して、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼児期にふさわしい活動全体を通して資質・能力が育まれている具体的な姿である。

このような姿は、自発的な活動としての遊びを通して、3歳児、4歳児の時期から、幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことが大切である。

(3) 環境を通して行う教育

- ・ 幼児期における見方・考え方（人・もの・状況などの身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして試行錯誤したり、考えたりする）を生かし、よりよい教育環境を創造する。
- ・ 幼児の興味や関心、欲求等の心の動きを把握し、活動の流れや遊びの展開を深め、主体的・対話的で深い学びにつながるよう、状況に応じて情報機器を効果的に活用し、環境を再構成していく。
- ・ 認める、共感する、励ますなどの関わりを通し、幼児と心を通わせ自己肯定感を高め、子ども自らが探索しながら学んでいけるように支援していく。



(4) 一人一人の幼児の特性に応じた指導

- ・ 幼児の実態を多面的に把握し、一人一人の特性を理解する。
- ・ 0歳からの育ちを踏まえ、発達の過程や実情を的確に把握し、具体的に育てたい姿を明らかにする。
- ・ 特別な配慮を必要とする幼児の指導については、家庭や医療、福祉などの関係機関と連携した「個別の指導計画」を作成し、幼児の好きなことや得意なことを生かしたり、まわりの幼児との関わりを意識したりするなど、指導内容や指導方法の工夫をする。
- ・ 園生活での温かい人間関係づくりに努め、多様性を受け止め、互いを認め合う肯定的な関係を作っていくようにする。

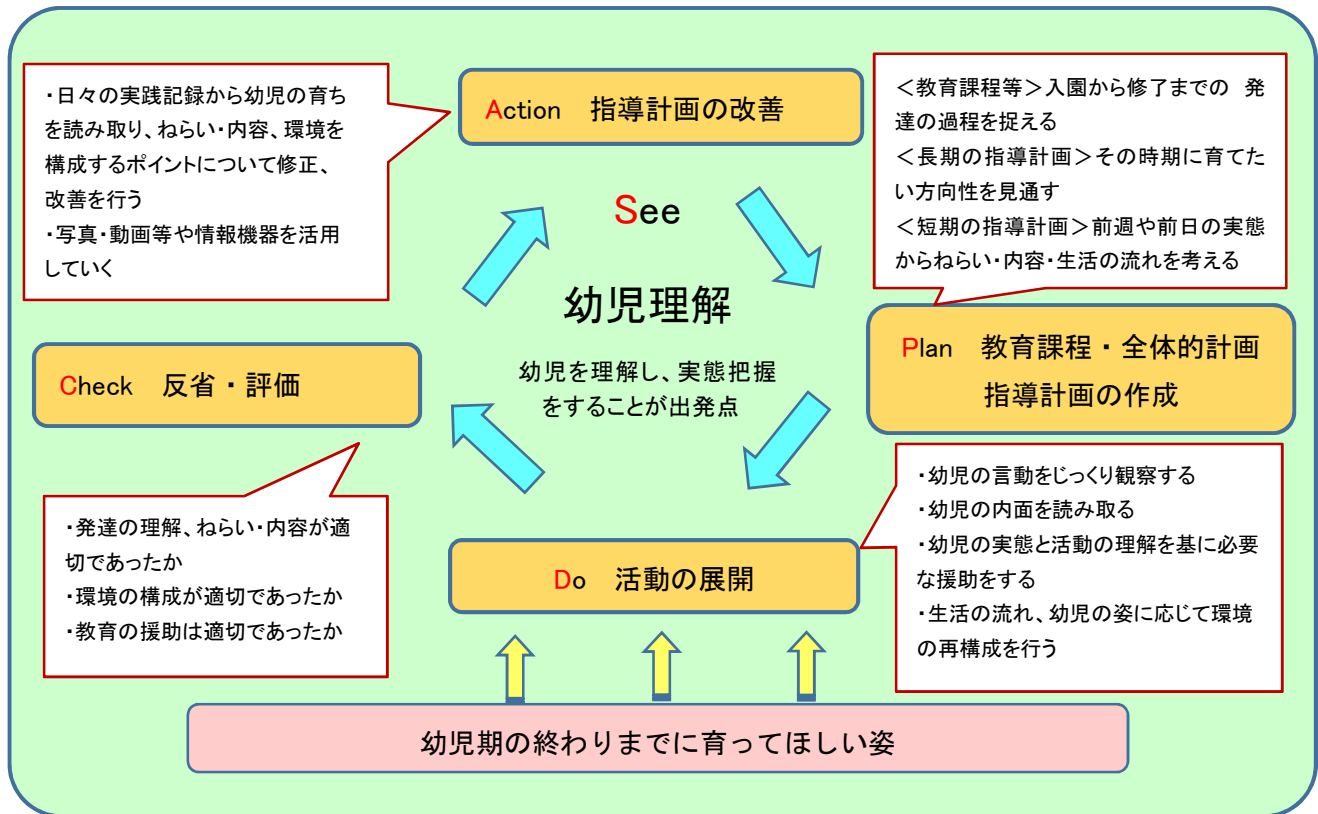
(5) 教育活動の充実に向けた体制づくり

① 各園の実態に応じた教育課程、全体的な計画、指導計画の編成・作成

- ・ 幼児の発達に即して、一人一人の幼児が幼児期に必要な体験が得られるよう指導計画を作成し、実践する。
- ・ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」等を踏まえて保育を振り返り、教育課程等の見直しを行う。



【SPDCA サイクルによる教育活動の充実に向けたポイント】



② 園と家庭、地域、専門機関との連携・協働による子どもの成長を支えていく体制づくり

- ・ 地域住民、保護者等と協働して園づくりビジョンの実現を図ると共に、地域のネットワークの中で、自然や人材、行事や公共施設の積極的な活用を行う。
- ・ 幼児教育の専門施設として情報発信の役割を果たし、園が地域における子育て支援の場となるように努める。

(6) 「遊びを通しての総合的な学び」から「より自覚的な学び」へ

- ・ 幼児教育において育まれた資質・能力を踏まえ、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりに幼児期の実態を理解するとともに、子どもの成長を小学校と共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解し、接続の一層の強化を図る。
- ・ 互いの考えを認め合いながら、学ぶ喜びや充実感につながる協同的な遊びを充実させる。
- ・ 新教育プログラムの6つの柱のそれぞれの基礎となる就学前教育において、遊びや生活を通しての姿を小学校に伝え、つながりを意識して取り組み、「連続性」「一貫性」のある指導を行う。



気持ちを共有する体験を重ねる



数量や図形への興味・関心を広げる



経験したことや感動したことを友だち同士で伝え合う